

備陽史探訪

第 82 号

 発行
 備陽史探訪の会
 福山市多治米町5-19-8
 TEL. (0849) 53-6157

再び永禄二年の篠津原合戦について

田口 義之

去年一二月、無念にも登山を断念した庄原市高町の篠津原雲井城に再び挑戦することになった。当日の晴天を祈りながらこの稿を書いているわけだが(三月二〇日)、私にとってこの篠津原雲井城は長年の研究テーマの一つである。

前々号で、この篠津原をめぐる久代宮氏と山内首藤氏の戦いの概略を「永禄二年篠津原合戦記」として小説風にまとめてみた。概ね好評だったようで、二、三の方からご質問を頂いた。しかし、やはり論文でなかっただけに誤解を招いた点もあったようである。そこで、今回はこの合戦の当事者、久代宮氏と山内首藤氏の抗争を史料に基づいて検証し、改めてこの合戦の原因に迫ってみたい。

久代宮氏の姿が初めて『山内首藤家文書』に現れるのは、年不詳九月五日付の塩治氏盛書状に於いてであ

る。この書状は、氏盛が山内豊成に對して、豊成の要求した「宮高方知行分高郷」の安堵を守護山名俊豊に取りなすことを報じた文書で、年代(明応末年)から文中の「宮高」を久代宮氏の宮高盛に比定できる。つまり、一五世紀の段階では雲井城の存在する「高郷」は久代宮氏の支配下にあったのである。

次に同文書中に久代宮氏が現れるのは、下つて天文年間(一五三二―一五五四)の後半のことである。この時期、山内首藤氏の当主は豊成の曾孫に当たる隆通であるが、同じく守護山名氏の重臣塩治綱が隆通に宛てて認めた条書(二二三号)に

一、宮跡職事、是又被加御袖判候間、可被得御意候

一、久代当知行分事、被成御判候、珍重候

とあるのである。

文意は、守護山名氏が「宮跡職」と「久代当知行分」の知行を山内首藤氏に認めたもので、これがすなわち、常に問題となる天文二年(一五五三)一二月三日付山内隆通条書併毛利元就等連署返書(山内首藤家文書二一六号)の前提となった文書である。

「宮跡職」とは言うまでもなく、天文一〇年(一五四一)に断絶した備後宮氏の惣領「宮下野守家」の遺領のことで、同家の遺跡が久代宮氏と推定される宮彦次郎によって「切取」られたことは『大館常興日記』天文一〇年八月四日の条に明証がある。次の「久代当知行分」については、山内隆通条書の「宮家併東分小奴可、其他久代当时知行分」の「東分小奴可、其他久代当时知行分」に当たると考えられ、勃興期にあった久代宮氏が武力によって押領した他氏の所領のことであろう。

つまり、この文書は、山内首藤氏が久代宮氏に對して、その所領を要求しうる権利を上級支配者である守護山名氏に認めさせた、極めて重要な文書なのである(天文二二年の山内隆通条書に對する毛利元就の返書はこの権利の追認である)。

これら一連の文書の背景にあったのは言うまでもなく、久代宮氏と山

内首藤氏の対立抗争である。久代宮氏は「久代」を称したように旧奴可郡の東南部に位置する東城町久代に興った国人である。同氏の戦国期の行動を見ると、居城を西城の大富山に移しているように、東よりも常に西方庄原方面に関心を持っていたようである。この理由は判然としなが、その大きな要因は庄原盆地に割拠した山内首藤氏の存在にあったことは間違いない。

久代宮・山内の両氏は共に中国山地の砂鉄を経済基盤としていた。砂鉄は河川の水運によって他地域に運ばれる。居城を西城に置いた久代宮氏は城下の西城川の水運に関心を持っていたに違いない。しかし、その下流には山内首藤氏が盤踞していた。久代宮氏が西城川の水運を支配下に収めるためには山内首藤氏の勢力を押さえる必要があった。こうしたことが西城盆地の西の出口である高郷に両氏が執着した原因ではなからうか。

さて、久代宮・山内両氏の抗争は天文二二年の暮、遂に発火点を迎えた。同年の一二月は備後北部で戦われた尼子・毛利の合戦が、尼子氏の敗退によって一段落した時期である。両氏は周辺から尼子の勢力が後退した時期を見計らって実力行使に及ん

だ。

同年一二月二九日付の毛利隆元の自筆書状は言う、

「来春に於いては、やがて山内・久代は取り相いを始め候事たるべく候」

〔毛利家文書〕六六三号と。

ここで面白いのは、隆元はこの戦いで毛利氏は久代宮氏を援助するべきだと父元就に述べていることである。毛利氏としては隆通条書の返事で、山内首藤氏に対して久代宮氏の「当知行分」の領有を認めた筈である。にもかかわらず、この文書で隆元は「久代へは一廉力を副」えると言っている。これは一体どういうことか。考えられるのは毛利氏は「二枚舌」を使っていたのではないか、ということである。おそらく久代宮氏に対しても何らかの保証を与えていたのである。一方の当事者（ここでは山内首藤氏）の文書だけで物事を判断すると大変な過ちを犯すことになるいい例である。

この時期の両氏の抗争を示す良い例は、世羅郡の国人湯浅里宗に宛てた年欠一〇月四日付山内隆通書状〔秋藩閥閥録〕一〇四である。この書状によると、山内・久代宮の両氏は神石郡神石町一帯で合戦を繰り広げたようで、山内氏には同町高光

の高光氏が味方し、久代宮氏の側には同町永野の黒岩城主宮氏が味方し、互いに勝敗があったようである。隆通が未だ「少輔四郎」と称していた時期のものであるから、天文末年のこの時期のものとしてよい。

永禄に入っても両氏の抗争は幕を閉じなかったようである。天正八年（一五八〇）九月六日付の穴戸隆家同元孝連署起請文によると、

「小笠原陣中に於いて久代、（山内隆通が毛利氏に対して）現形致すべしと申し、御領（山内氏領）高の儀、彼方（久代宮氏）持ち出しに仕るべし」

と、毛利氏に注進に及んだと言う〔山内首藤家文書〕二八四号。〔小笠原陣中〕とあるから、毛利氏が尼子方の石見小笠原氏を攻撃中の永禄元年のことである。この時は山内氏に親しい穴戸氏が隆通の無実を申し張り、事なきを得たと言うが、（同上）時期と言ひ、御領「高」が焦点になっていることと言ひ、この事件が永禄二年（一五五九）の「篠津原合戦」の直接の導火線になっていることは間違いない。

すなわち、永禄二年六月の「篠津原合戦」は、天文年間の久代宮氏の西方への進出を背景とし、天文二二年末以来戦われた久代宮氏と山内首

藤氏の対立抗争の、最後の武力対決と捉えるべきなのである。

なお、「篠津原合戦」の日時を「天文二二年」とする説もある（伊藤本「久代記」）が誤りであろう。

一般本「久代記」を始め、比較的良質な近世史料は皆永禄二年説を採っており、史料による限り、両氏の抗争舞台に「高」が現れるのは、先に述べたように永禄元年、西暦一五五八年のことなのである。

会報八三号の原稿募集

原稿締め切り五月二三日（土）

到着分（必着）まで。

編集時間等の関係で締め切り後に到着した原稿は掲載できない場合がありますので早めにお送りください。また最近投稿が増えていますので原稿は一号につき一人一本に限りま（厳守）。

原稿は本文「一行一六字×一二〇行」でちょうど一ページです。以下三行毎に一ページの一段になります。写真がある場合でもできるだけ二ページ以内でお願いします。

四〇〇字詰め原稿用紙を使用する場合、下一字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。皆様の力作を期待しております。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

芦田町の史蹟巡りを終えて

芦田町郷土史研究会

堀 享

一、はじめに

この度、備陽史探訪の会と芦田町郷土史研究会との共同主催として、芦田町の史蹟巡りの現地研修を二月十五日(日)実施いたしました。

当日は、案じていた天候にも恵まれ、参加者も百三十名近い人数となり、予想以上の盛会となつて有意義な催しでありました。これも一重に備陽史探訪の会の田口会長のご配慮の賜物と感謝申し上げます。

そもそも、この計画は、田口会長の発案により、昨年の総会で正式発表がありました。これこそが本来、郷土史研究会の目指すもので、大いに期待するところでありました。

昨年の十一月は、毛利元就関係の史蹟一泊研修で多忙なうちに過ぎました。そのうち、十二月に入ると、史蹟巡りの具体的検討に入らなければというところで、年の瀬も迫った二十日頃、田口会長との連絡を取りつけ、我が会では、年末までに現地調査を完了して、正月休みに企画立案することになりました。それにしても、経路と時間設定が日程通りに運ぶには多少無理があり、近道探しに

心労を費やす結果となりました。

一月二十二日には、備陽史探訪の会から会長、副会長同道の来訪を得て、我が会から村上会長、星野幹事、小生で具体的協議に入り、現地の麓まで案内して最終的打ち合わせを終了しました。

早速、一月三十日(日)午後、登山道の草刈り、倒木整理作業を実施しました。ここで特記すべきは、草刈り作業に地元山方支部の大勢の方々のご協力奉仕によって、予想以上に作業がはかどったことに対し、心からお礼を申し上げます。

二、雑感

当日は天候も持ち直してまずまずの遠足気分を満喫する日和となり、童心に返った気分集合地に出かける。待つ内にバスも到着して、備陽史探訪の会員の方々の到来、両会長挨拶や対面式も程々にして出発。

国竹城跡に立つと、平地に近い小丘陵。城跡のイメージには程遠いものがあるが、日常生活優先に考えれば、むべなるかなであるが、それ以前になぜ有地地区が選ばれたのか、本人に聞かないと分からないことだが、地理的条件から無難な位置付けだったと思う。

それにしても、有地氏がこの地を求め、宇山、国竹に根城を構えた

しても、その勢力は一ヶ村を横領した程度で、極めて弱小城主だったはずである。しかし、殿の奥、大谷(久の平)と転住するにつけ、次第に実力を付けて来たことは、隣の利鎌城を攻略したり、本家宮氏を脅かすまでに勢力の拡張を計ったという。このような背景の中で、戦国の世相において、城主と武士階級、武士と農民との人間模様はどの様なものだったのだろうか、そんなことを考えながら殿の奥・大谷城跡を見上げると、みるからに中世の城郭の跡といった雰囲気を与えてくれる。

国竹城、殿の奥城、大谷城、更には相方城が四顧の間に位置して眺められることは、将に壮大な展示場を思わせると共に、有地氏の繁栄を示すものでもある。殿の奥、大谷の山頂に立つと、山々が一望でき、広範な地域を眼下に眺め、難攻不落こそが自衛上、最良の築城であり、地の利の有為性が問われた時代でもあったものと考ええる。

それにしても、城跡という地元文化財も、登ろうとしても荒れ放題に荒れていて、登れないというのが実態であろう。私も殿の奥に登ったのがこの度が初めてで、(この度三回登った)恐らくは最後だと思いが、中世の城郭についての基礎知識もで

きたように思う。郭をとりまく堅堀、空堀、それに土橋といった防衛体勢。地形を活かした戦国山城の特性を如実に示している。

下剋上の厳しくも激しい時代の転換期に、群雄割拠の国人衆が互いに覇を競い、抗争の絶えない中であつて、懸命に生きようとする武将たちの亡霊が目に見える。

「燈台下暗し」という言葉通り、身近過ぎて無関心ということもあるが、これだけの文化遺産を、後世に広く伝えていくべき責務が現代に生きた生きた責務が課せられていると思う。そう、歴史は一日にしてならずである。當々として積み重ねてきた生きざまを直視し、より発展的に受容してこそ歴史的発展があると思う。微力でも郷土史研究の火を絶やさないようにしたいものだと思う今日この頃である。

中世を読む

『備後古城記』を読む

〈実施要項〉

日時 四月一八日(土) 午後七時
五月一六日(土) 午後七時
場所 中央公民館会議室
テキスト 一〇〇〇円(既購入者不要)
資料代 実費(一〇〇円程度)

千田・蔵王地区の 磐座信仰について

出内博都

千田・蔵王の平地の北を限る加賀圭山山系の支峰、標高一七〇メートルの天神山の麓に蔵王天神社がある。天神社にしては珍しく祭神が須佐之男命である。この天神社はもと天神山の中腹の巨岩の上に祀ってあったものを、宝永年間、何かのことで流血事件があり、それを機に山麓に移したと伝えられている。

元の社殿のあった場所は、比高約四〇メートルの中腹に巨岩が数個群がった岩場で、その様は実に壮観である。まさにここは天神即ち天の神（アマツカミ）を祀るという磐座信仰の場所にはかならない。

磐座信仰とは、古代における石神信仰の一つである。神社発生以前には、神を随時、石や樹木に招き降ろして祀ったので、この石が神の座として固定すると、石そのものが神聖視され、御神体になる場合が多い。本来「いわ」には堅牢という意味もあり、磐石の座で神のまします所と考えられた。また、岩井などのように、岩のあるところから水が湧く場

合もあるので、この面からも石を神聖視する信仰が生じたといえよう。

磐座信仰が遺物などによって明確に検証できるのは古墳時代からである。たとえば、有名な三輪山山麓の山の神遺跡では、自然石の周囲から多数の石製・土製の模造祭器が出土しているが、このような遺跡は全国各地にかなりある。多くの場合、これらの石や岩には各種の伝説や信仰が残されている。中世以降は腰掛石、櫃石、御座石、影向石、姥石などと呼ばれることもある。

天神・天の神という場合、原初的には人間生活の基本に関わる生産、雨、風、雷などの自然神を意味したと思えるが、神道体系が整備されるにつれて、天神は高天原系の神（アマツカミ）という概念が加わり、この神社の場合、自然神名がいつのまにか須佐之男命というアマツカミに具体化されたものであろう。

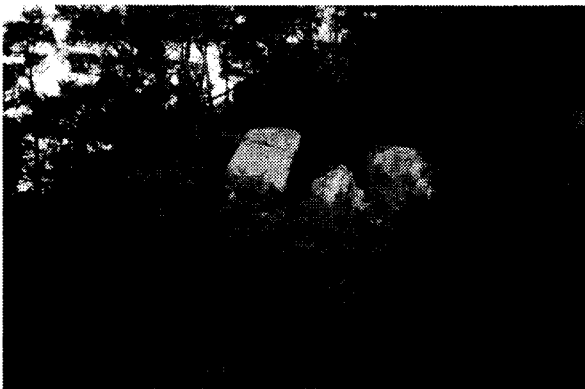
自然神が現象ごとに具体名ができていくなかで、天神信仰は雷神信仰へと変化した、道真の怨霊がしばしば雷火の厄となったため、天神（雷神）といえど道真を指すようになった。

しかし、より古い原初的な天神社には自然神やアマツカミを祀ったもの

がかなりある。

に呼んでいる。千田の方では「みようと岩」と呼ばれている。確かに角張って屹立した岩と、平たくて丸みをもった石の組み合わせはこの名にふさわしいといえよう。また、他の人は屹立した岩を「烏帽子岩」、平たい方を「鏡岩」といい、さらに両者相対して霊気を発すという、穿ったいい方をする人もある。

いずれにしても千田・蔵王のどこからでも見えるこの二つの岩は正し



天神山の磐座「みようと岩」

く磐座そのものである。直下の平場に祭祀跡らしき石組も見られるが、土砂に埋まってよく分からない。以前ここから土器片や刀の断片が出たという伝承もある。また、神の依代としての磐座への道には、神聖な道として、登る途中の各所にお大師堂やお地藏さんが祀られてもいる。

なお、この岩から南へ〇・六キロ、蔵王山頂を見通した線が千田と蔵王の境界線になっている。このように蔵王山とこの岩は地域に根を下ろした大きな存在であった。

この磐座から西へ二・五キロ行つた横尾集落の峠山の頂上に「岩大明神」という社がある。かつてここにも磐座があったが、盈進学園の校地造成のため、岩そのものは失われてしまった。蔵王天神・岩明神両社の関係を示すものとして、春秋の彼岸の中日に太陽が二つの岩の上を通るとの伝承がある。これは二つの磐座が信仰の上で何らかの関連をもっていたことを示すものであろう。この岩明神の祭神は「福山志料」に「屋船豊宇気姫命、御神跡ハ石ナリト云」

とあり、同じ天神系でも異なっている。現地には「岩明神」という小字名もあり、地域をあげての磐座信仰が生きてきたといえよう。

飛鳥路

石井 しおり

水の緑も春浅き、建国記念日の二月十一日、毎日ラジオ放送企画による、かのご高名な万葉学の大家、阪大名誉教授犬養孝先生ご指導の第十七回「飛鳥の路ラジオウォーク」へ参加の旅である。

その朝、七時二十分福山発の「びんごライナー」にて出発、早春の空を見上げれば、春の日差しもうららかに、過ぎ去る山口に霞たなびく上天気である。まほろばへの夢はふくらむばかり。

近鉄「あべの橋」から乗り換え、やっと飛鳥駅着。既に参加者が群衆の如きであった。

今、十一時半、急いで田んぼの畔にて昼食。腰をおろす足もとの小川はサラサラ流れ、岸の新芹を洗っている。大和三山を渡ってくるおいしい空気を満腔に、当地名産の「柿の葉ずし」を摘むのは、とびっきりの美味であった。

スタート地点の明日香村阪合小学校跡を十二時十分発、各自いよいよイヤホン付ラジオを装備する。

まず、五世紀の頃百濟から渡来した阿知使主を祭る於美阿志神社へ。

故郷に似たこの地に心の安らぎを求めたのであろう。王族、官僚、技術者、僧侶など、あらゆる階層の大きな集団であったという。

幾星霜を重ねた今も、凝灰岩製の十三重の石塔が、今は二層消滅したけれども、苔むして立っていた。

続いて文武天皇陵、これより右に歴史街道標を見て飛鳥の道に入り、なだらかな丘の起伏の中に、有名な高松塚古墳が見え、更に往くと広い地続きの先に飛鳥歴史公園がある。やがて平田川にかかる扇橋を渡り、畦道を進むと坂の上に「鬼の俎」その下に「鬼の雪隠」がある。鬼がこの岩の俎の上で旅人を料理したという伝承があるが、古墳であろうといわれている。さらに野道をを往くと、左に「亀石」が見えてくる。大きな亀が俯したその下部の左右に、目玉かと思わせる鑿の跡がある。なぜこのような石造物を野辺においたか、まだ議論が続いている由。

歩きながらたなづく青垣を望み、そして甘樫の丘へと眼を転ずれば、豊かな自然に囲まれた飛鳥を、当時の人達がどんなに愛し、人生を謳歌したであろうか、と思ひ渡る。

次は橋寺。聖徳太子が母后を偲んで発願されたところあり、ゆかしく清楚な伽藍である。

そして川原寺跡へ。かつて大宮大寺、飛鳥寺と並んで三大寺の一つと数えられた。それはそれは広大な跡地である。この庭で、蹴鞠、相撲も行なわれたことであろう。遠くからその掛け声も聴えてくるような、そんな錯覚さえ覚える。

意外にもここに、ラジオ局の特設舞台があり、奈良時代の衣裳も美しい女性四人のボーカルがあった。山に飮するやさしい歌声と、軽やかにそよぐ薄絹の裳裾は、わが魂を天平の彼方へ拉し去ってしまった。

小憩ののち、歩みつつ講師が万葉調で詠う「明日香川 瀬々の玉藻のうちなびき 心は妹に寄りにけるかも」(「万葉集」巻三・三二六七による)を耳に聴きながら、飛鳥川にかかる飛鳥橋を渡り飛鳥寺へ。百濟夫余の軍守里麻寺をモデルにした、わが国最初の本格的な寺院である。

推古四年(五九六)建立の内陣には、その十四年に鎮座遊ばした飛鳥大仏がいらっしやる。たびたびの兵火で伽藍は消失と再建を繰り返したが、ご本尊は、その苦難のたびの傷跡を残しつつ修理され、威厳と慈悲に満ちたお姿で生き続けてこられた。恭しく拝顔する。

飛鳥寺を出ると、右手に蘇我入鹿の首塚が見えてくる。千三百年間を

ぼつんと立つ首塚に惻々と胸を打つものがある。燦々と降る春光の中、冷気が背筋を走り抜ける。

少し歩いて伝飛鳥板蓋宮跡へ。大化の改新の幕開けとなった中大兄皇子と藤原鎌足による、蘇我入鹿暗殺の場所である。斬りつけられた入鹿は、息も絶え絶えに「何の罪で」と反問するが、やがてこと切れたという。青い眼、茶髪、二メートルを越す大男という伝承は、或いは異邦人であつかも知れない。あわれ。

飛鳥川を越えて右に、最後の見学地「石舞台」へ。蘇我馬子の桃園墓説が有力で、築造は七世紀初めと推定されている。その巨岩と規模の大きさに、当時の最権力者を見る思いがする。飛鳥を代表する古墳であるが、機械力のとほしい時代に、いかにして築造されたのかとしばらく逍遙する。

予定通り四時過ぎ終点、参加者は一万六千人、古代を訪ねて畦道をくねる長蛇の列は、一キロにも及んだそう。

イヤホンを耳にそのかみのまほろばと共に生き、汗を流して暮らした飛鳥の人々を思う。そして今、混沌と失速の現代なればこそ、その中に「青き光」を求めて止まぬ旅でもあつた。(平成十年二月十一日記)

その歌島にはかなく 和泉式部は歌う

柿本 光明

尾道市の浄土寺山（瑠璃山）頂から眺めると、尾道水道を隔てて南に向島の山々が鶴が舞っているような姿に見える。これを称してか、古から尾道の津を鶴の港といっている。

承平年間（九三一一—九三八）に源順によって編纂された日本最古の百科事典『和名類聚抄』の御調郡名に「哥島—宇多乃之島」と載っている。これが、向島が文字として記録に残っている最古のものと思われる。

「歌島」とは向島のこと、向東町（尾道市）に字名「歌」としてその名をとどめている。中世には大炊寮領歌島庄に含まれていた。歌島の名から和泉式部の寄留の伝説が生じ、大治三年（一一二八）頃成立した源俊頼の自撰歌集『歌本奇歌集』には「歌の島といふ所にて女のうたをうたひてものこひけるに（後略）」との詞書のある歌が載っている。

現在の向島は周囲二八キロ。広島県内の島は七里（二八キロ）七島、五里（二〇キロ）五島といわれ、その中では大きい島の部類である。

宇多乃之島
眺むるもあそぶもおなじうきしまの

松のいろ香ぞ

千代はゆるかな
蕉鹿庵蚊獄主人

眺めても来てものするもかはらじな
波にうかべる うたのうきしま

翠月道人

景色は今も昔も変わらぬ浮島で、尾道側の山頂から眺めても、また、向島からの丘陵からの眺望も、全く絵の島であり、歌の島である。

私は少年時代に、向島を歌島というのは、昔和泉式部という女流歌人が来て和歌を詠んだことからいい伝えられたと、祖父から教えられた。

当時、向島東村の東部の歌という地区の西金寺も建立し、南東部の古江浜の垂れ松（下がり松）も和泉式部の植えたものであると……。

平安時代の王朝女流文学者の中でも『和泉式部日記』『和泉式部集』を後世に残した和泉式部は、情熱的な生き方と豊かな情感の和歌で知られる女流歌人である。

だが、その生年も没年も不明である上に、才色兼備、多情多恨の生涯から、多くの伝承が語り継がれてきたが、資料が乏しくて不明な部分が多く、生誕地も北は岩手県和賀から南は佐賀県杵島まで、その間数十ヶ所とも伝えられている。

それは和泉式部の伝記を語り伝える遊行女が広く全国を旅したためと

もいわれている。

尾道市向東町は私の出身地である。これから書き綴ることは、先日現地歌地区の西金寺、古江浜地区の垂れ松の跡地に行き調査した際の私の自然観、それと対比される人間観を、和泉式部の女心のありようとともに汲み取っていただきたい。

『芸藩通史』の西金寺の項に「歌島山と号す、云々、和泉式部の建立にて安置せる釈迦、観音共に共持仏なりと。その他にも遺物ある由、舊記には見えたれど今は亡べり。古は大事なりと見えて古瓦十二片を遺せるが満面に経文を焼付、文治九年壬申と彫てあり、文永は龜山院の御宇なれば和泉式部よりは遙に後なり、されば式部の遺言と云も信じ難し、但し文永に再建せるにや」

『備後古跡志』に「歌島は向島の古名也、今は纔に向島の内一浦の名となれり、歌の浦は和泉式部の生れし所と云ふ」

『西備名区』に「西金寺、禅寺、開基には和泉式部此に住みて草創す、本尊は阿弥陀、釋迦、観音いずれも和泉式部の安心仏なりとぞ。古へは大伽藍にてありし見へて、いつの頃にや破壊に及び、今のすがたとなれり。地

をひらきし事ある時は古き瓦を多く掘出せしに、悉く経文ありしと云ふ」

『広島県史』に

「口碑には和泉式部創立といへり。木曾義重再建天保十二年三月再建」

『御調郡史』に

「歌島山と称す、長徳四年（九九八）和泉式部、嚴島参詣のため下りしが海上暴風起り波浪荒く既に舟を覆さんとす。其時式部深く観音に祈誓せしかば風波忽ち静まり、終に向島古江浦に安着し、当寺を建立し観世音を安置せりと伝ふ。昔時は大伽藍たりしものの如く瓦に経文あるものを出すといふ」

古江浦（現在の古江浜）はその昔向島東村（現在の尾道市向東町）の南東の字名で、この松が鼻というところに古老の松の木があった。

人々は「古江の垂松」と呼んでいた。口碑によると、和泉式部がこの地に船泊まりした時、土地の人よりここに菅原道真の由緒あることを聞き、その天神山に登り、四方の風景を眺望して賞美された。

生来植木好きな式部は、枝振りの良い松の木を見つけ、この松も南の浜辺に移し植えたいと夫保昌に相談すると、夫の君も宜しいと人手を頼み掘り起こし、今一息というところ

をひらきし事ある時は古き瓦を多く掘出せしに、悉く経文ありしと云ふ」

を力強い保昌がこれを引き抜き、南の浜辺に移し植えた。その枝は四方にはびこり、地に垂るるように十数メートルにも及び、幹の周囲は約六メートル、支柱数十本を要し、樹齢百年を過ぎても葉の色ひとつ変らず青々と茂り栄えたという。

萬代のかげを並べて 鶴の住む

古江の浦は 松こそたかき

『続後拾遺和歌集』の女流歌人相模「古江の垂れ松」古江の下がり松」といい伝わり、遠近からの観客が多く、浅野藩主もわざわざ見物に來られ、感嘆されたと『芸藩通史』に載っている。

式部の植えた松は明治十年（一八七七）頃に枯れ死し、同じ場所に二代目が植えられたが、昭和の初めには大樹となり、支柱七、八本を要する「下がり松」となったが、終戦直後に枯れ死した。その後三代目、四代目に植えつけたが、成功せず、現在その株元に「和泉式部手植下り松碑」と書いた石柱が立っている。

古江浜から歌へ通ずる道の「へるを谷（遍留遠谷）」の東奥の池に龍が棲んでおり、村人たちは、これを恐れて退治してもらいたいと和泉式部に願望すると、式部はその池のそばに行き、一心に観世音に経文を唱え祈念した。すると、池のそばの草む

らから一羽（雌雄の二羽という説もある）の雉子が矢のような速さで東南の空に飛び立った。

へるを谷おそしとぞおもふ唐衣龍をきじとは たれがいふらむ

式部はこのように歌を詠んだという。その後はまったく龍は出なくなり、村人たちは非常に感謝して、雉子の見えなくなった東南の山頂に龍王社の祠を建てたという。現在も山頂に登ると祠があり、昔は千天続きの時はこの龍王神に雨を降らせてもらうよう祈願したそうである。

この歌島の向東町森金地区に向東八幡神社がある。

『芸藩通史』には

「八幡宮、向東村に在り、東の宮と呼ぶ、相伝ふ、昔和泉式部此處に來り、当社を始め、今祠官の家に古鏡あり、式部が遺所なり」とあり、

『国郡誌』に

「向島東村八幡宮正歴中、和泉式部宇佐八幡宮を勤し玉ふ」とあり、

『御調郡誌』には

「正歴年中、和泉式部、宇佐より勤請す、式部所持の古鏡を存すといひ、一説には西の宮より勤請して東の宮と呼ぶ」とあり、

『児玉家累代祠官社記』によると「当社八幡宮、先年和泉式部住み玉ふ時、宇佐八幡宮御神霊を産神と

西金寺にある和泉式部の墓



貴敬奉也、此時より此島を歌島と申也」とある。

晩年の伝記が分かりにくい女性歌人、和泉式部。数々の和歌を残し、その和歌が勅撰集に採り入れられ、撰入歌数が他の女流作家と比べ、抜きん出ており、その歌の独自さを當時より認められたのが和泉式部である。

当時、彼女は和泉守で権大進を兼ねていた橘道貞と結婚した。つまり「和泉式部」という呼び名は道貞の和泉守によるものであり、結婚後の呼称である。のち冷泉天皇の二皇子の召人で室となり、とくに敦道親王とは格別深い愛となったが、それとはかない夢のごとき期間で間もなく死別する。その間すぐれた歌人となり、才能が高く評価されて、再び道

長の家司、藤原保昌の妻となった。丹後守となった保昌とも生涯の夫として永久に連れ添うことができなかった式部の晩年は、まだ不明な部分がかなり残るも、おそらくあまり幸福ではなかったであろう。

平安末期から、式部のことは多くの説話類に採り上げられ、また式部の和歌は死後、ますます重視されて勅撰集に多く採り入れられ、流布していった。こうして式部の人生は多くの人々から注目されるようになる。多くの説話類に採り上げられた説話が、また次の説話を生み、広がっていく過程は、他の女流作家たちよりも極めて大きかったといえよう。

歌浦（向東町）の西金寺の創建、古江浦に植えた垂れ松、向島東八幡社の創祀などはその代表的なものである。西金寺の裏山の墓地の中に高さ一メートルほどの無銘の五輪塔が式部の墓である。式部は老後をこの歌浦で過ごしたのではなからうか。八幡社の創建説もあることを考えると、歌島（向島）には特別な因縁があったのかも知れない。さらに、これらの伝説の内容、および遺跡の状態から考えて、平安以来の説話集と、どの種類のものが、どう結びつくかを調べ、その根源を可能な限り文章にまとめ明確にしたいと思っている。

芦田町を探訪して

小島袈裟春

福山市芦田町(旧葦田郡)は、西から東に流れて芦田川に会する有地川の流域に広がる谷間の平野に立地しているのだが、不思議な事には、その下流域は駅家町(旧品治郡)になっていて、さらに駅家町は大河である芦田川によって南北に分断されているのである。こうした行政区域の定め方は、昔の人たちも不自然と思ったのか、江戸時代の地誌『西備名区』に、奈良時代の事として次のような話が記してある。

西備の武倍山(今の高増山)の東に洲崎の如き広平の土地があつて、時の国司が朝廷に進言し、西の都を造るべく、大内裏を始め町割りが大方済んだ頃、一夜の間に山が湧き出し武倍山と続いてしまった。そこで山の名を「俄山」という。

荒唐無稽といわないで欲しい。区割りが済んでから地形が変わってしまったといっているのである。理屈を通り越して納得できる話ではないか。私はこうした寓話も好きだ。読んでいて楽しい。

さて、今回の芦田町探訪は会長の田口先生のご案内である。集合場所

の有磨小学校校庭は昨日までの雨が嘘のように晴れて、一般参加の他に当地区の郷土史会員の方々など老若男女百数十人と、大盛況であった。

見学予定地は、中世に備南を制した「宮氏」の一族で、有地川上流に入部した有地(あるじ)氏の史蹟である。有地氏はやがてこの流域平野一帯を手に入れ、三代元盛の時、山陰の尼子氏に従属する本家の宮氏を見限り、安芸の毛利氏に協力して本家に取り替ったのであった。

☆国竹城跡

有地氏の入部当初からの屋敷跡と伝えられ、主郭は畑地で、副郭には住宅があつていずれも私有地である。当日探索した範囲でいえば、国竹城は付近一帯に沢山ある低丘陵の一つに築かれ、南西から北東に張り出した丘陵の基部を大規模な堀切で区切り、頂部を広く削平して土塁を廻らし、南と東は順次下げながら削平してある。北側土塁は高く険しいが、他の面の防御はかなり劣ると思われる。私の受けた感じでは鎌倉末期の地頭の屋敷跡とよく似ていた。

先に出した『西備名区』には、有地氏は始め大谷の米迫城に入ったが、妖怪が出て多くの人を失ったので国竹城に移った、と記してある。妖怪とは何であろうか。またしても私は

興味津々なのであった。

☆殿奥城

標高一七五メートルの純然たる山城である。麓で眺めた時は間近く見えたのであるが、登ってみると結構大汗をかいた。特に主郭の周囲は急斜面になっていて登るのに苦労した。頂上は雑木等が生い茂っていて普段は入れないのだが、地元の歴史会の方々が今日のために切り開いて下さっていて誠に有り難い事であった。

田口先生は、有地氏が戦乱に備えて築城した経過や立地、城の縄張りや郭の名称やその役割などを分かり易くご説明され、またここから四ほど東に利鎌山城を築いた隣国の福田氏との確執についても話された。

私が特に感銘を受けたのは、有地氏と毛利氏との関係で、毛利氏の成長過程では、同格の国人同志として丁重な扱いを受けたが、毛利氏が豊臣政権に入ると、一転して邪魔者扱いされ、有地氏は遠く山陰に国替となり、伝統の根を絶たれた事である。これは一時代の前の神辺城主杉原盛重の扱いにも見える事で、彼の二人の子の横死は毛利氏の策略ではないかと密かに私は考えているのである。

☆正満寺

もう一五年程も以前の事であろうか、村上正名先生の書かれた『福山

散策』を読んだ私は、延元三年(一三三八、南北朝初期)真宗の存覚上人がこの地に来て、日蓮宗徒と法論を行ない、宗徒を論破した事によって許可された格式の高い五条の堀があると知って見学しようと訪ねたが、見つからずに帰った事がある。

今回ご案内を頂いて有り難かった。しかし、私が眼にした堀は黒線が四本しか見られない?質問しようと思ったのだが、謎は残る事となった。

収穫は、この寺のすぐ東の小尾根が中世の宇土城跡との事、また背後の稜線には後期の古墳群が残っていると知った事。そういえば、この付近には矢部迫古墳群、水行古墳群、堀町大塚古墳、曾根田白塚古墳などが存在しているのである。五月の親と子の古墳めぐりの新しい候補地として如何だろうか。

さて、私達が最後に訪ねた正満寺からは意外な贈物を頂いた。それは緋織りの飾り布である。表側は紺地に白で、瑞獣といわれる玄武が織り出してあり、裏は色布で方形に仕立て四隅は飾り糸が付いている。

かなりの物と思うが、参加者全員へとは相当の出費であろう。何か申し訳ない気持ちであった。

そういえば、芦田町は備後緋発祥の地である。先に出した村上正名先

生著『福山散策』によれば、幕末の嘉永六年（一八五三）下有地谷迫の、富田久三郎という青年の工夫で耕模様が織り出され、以後彼の研究改良によって備後の主要産業として定着したのだそうである。

もう一つ触れておかねばならぬ事がある。それは本文に再々引用している『西備名区』の著者、馬屋原重帯先生で、先生は宝暦十二年（一七六二）有地川の下流、芦田町に接した向永谷村の庄屋に生まれ、天保七年（一八三六）七十五歳で逝去されたが、その間に『西備名区』九十巻のほか『職徴稿』千七百七十巻、『風俗問状対書』等を著された。

これらの著書は今日私達が備後の地域史を考える時必ずといってよいくらい参考になっている。今回の「芦田町の史蹟巡り」の資料にも再々引用されていて、何故か私はホッとしたのであった。それは『西備名区』は誤りが多いとして当書の引用を嫌がる方々もあるからである。

さて、芦田町の探訪も天候に恵まれ、盛会の内に無事終了したのであるが、最後がまた良かった。中村副会長が中世の城攻めに事掛けて「一兵も損する事無く」と挨拶された時、期せずして大きな拍手が沸き起こったのであった。一九九八年二月

墓とは何か

終末期古墳の設計思想

門田 幸男

奈良県の黒塚古墳出土の銅鏡やキトラ（亀虎）とも。実際には小字名の「北浦」からの音便変化らしい）古墳の四神獣の壁画が話題を集めていますが、ここでは当時の人々がどういう気持ちで墓を造り、何を思っている死者を葬っていたかを考えてみようと思います。いわば、古代人の他界観・死生観を探る、といったところでしょうか。

古代の人々は現代人と違い、抽象的に物事を考えることが不得手だったようです。自然現象なども自分たちの現実生活の体験になぞらえて理解していたと思われれます。たとえば、すべての生き物の母である太陽は、早朝、東の空の彼方に「生まれて」夕刻、西の空の彼方に「死んでいく」というようにです。

沖繩では、日が沈むと太陽の洞窟（テダガガマ）にこもり、東から再生すると長い間信じられてきました。人の種もまた東方の祖霊の世界（ニライカナイ＝常世の国）からやって来て男性に宿り、男女の交わりののち母の胎内にこもった末に誕生する

とされていきました。一方、死んだときには逆方向に移動します。喪屋洞窟（岩屋等）や墓（土中・穴にこもったのち東方霊界（浄土教では西方浄土）に再生すると考えたのです。

こうした考え方は、現代ではほとんど失われていますが、時をさかのぼり、古代（弥生時代後期から平安時代の末まで）の人々にとっては、あるいは普遍的な考えであったかも知れません。しかし、この時代の一般庶民の死生観を実際に論証することはまず不可能です。文字の記録がありませんし、墓にもほとんど何も残っていないからです。何か残っているのは特別な地位にあった人間の墓だけです。

古墳時代の前期に入ると前方後円墳が築造され、ヤマト王権の実権を握った大王や、ヤマト政権に参画した地方の王首長による古墳祭祀が始まります。この時代にもそれなりの他界観はあったはずですが、やはり文字資料がないため、その内実をはっきりさせることは容易ではありません。中期・後期には、形象埴輪や横穴式石室に描かれた素朴な絵画などの事例が増え、当時の人々の死生観もある程度復元できるようなってきています。しかし、本格的な解明は古墳時代の終末期（飛鳥時

代）まで待たねばなりません。厳密には、時代の最先端をいく、七世紀の支配者層の他界観・死生観ということになりますが、ともかくこの時代になると、国内に文字資料が存在し、考古資料でも中国の文献と対照できるものが出てくるのです。

たとえば、高松塚古墳はどうでしょう。この古墳の壁画の発見は、現在の古代史ブームの原点となったことであまりにも有名です。横口式石槨の東西の壁に描かれた女性像は美術的にもたいへん優れたものですが、私には彼女たちが裳（スカート）をひるがえして外へ向かって歩き出しているように見えます。これを見ていると、墓は永住する場所ではなく、仮の宿だと古代人が考えていたように思えます。

高松塚古墳キトラ古墳（も）の設計には陰陽五行の思想が盛り込まれていることは、数多くの識者が指摘している通りです。

高松塚では、天井に北辰（北極星）を中心に二八宿（星座）が描かれています。これらの星宿は本来方位には関係ありません。しかし、陰陽五行思想に従って東西南北にそれぞれ七宿が配置されたとされます。また、これに対応するように東壁に青竜、西壁には白虎、北壁（奥壁）に玄武

が描かれており、実際にはありませんが(おそらく剥落したのでしょ)南壁(石室を閉塞している内壁)には朱雀像があつたはずですよ。

さらに、これらの四神獣が陰陽思想によるものならば、東西の壁に描かれた男子像・女子像もまた、当然陰陽思想を表象しているものといつてよいはずですよ。

民俗学者の吉野裕子先生が、「とりわけ女性群像の色彩、およびその色彩の配置から、そこに日本古代信仰と陰陽五行思想の習合がうかがわれる」

と「隠された神々―古代信仰と陰陽五行―」(人文書院・講談社刊)の中でおっしゃっているように、男性像や女性像の配置も陰陽思想に照らせば深い意味があるのですが、いまここでは触れないことにします。

ところで、高松塚の石槨は南へと開口し、ここが現世と常世の通路になっているのですが、これには特別の意味があります。

後天易によると、方位の南は「火氣」であり、同時に「中女」を表わしています。ですから南の入口(同時に出口)は火処(ほと)つまり女陰を暗示しているのです。なぜ火処なのでしょう。それは後天易では人が「土氣」に当てはまり、さらには

「火生土(火は土を生む)女は人を生む」原理があるからです。

吉野先生は当時の死生観を次のように明解に述べていらつしやいます。

「人の命は陰陽交合の結果、母の胎に萌す。この命がこの世において燃えつきた状態が死であるが、輪廻の法からすれば生命は復活すべきものであつて、死者は再びその来た所、つまり常世の国に生まれ出ようとする接点にあり、いわば次の世に新しく生まれ出るべきものの萌芽である。新生という言葉は簡単に使われるが、新生できるものは胎児だけである。死者はこの意味で胎児であり、墓は(洞も穴も岩屋も土中もすべてふくめて)死者という胎児を納める擬似母胎である」(前掲書)

要するに、高松塚古墳の横口式石槨は母胎の象徴ということですよ。

仏教の影響で、ふつう私たちは死者の頭位を北枕と考えます。しかし、陰陽五行思想を正しく理解していれば、高松塚古墳やキトラ古墳の被葬者が北枕でないことがすぐわかります。もし北枕ならば、再生して生まれ出てくる子が逆子になってしまいます。考古学的にもいづれ証明されるでしょうが、死者は南枕で葬られていたはずですよ。

バス例会

西大寺・牛窓・邑久の史跡巡り

あと若干名募集

四月のバス例会「西大寺・牛窓・邑久の史跡巡り」は応募者多数のため、九〇名まで募集して、バス二台で実施することになりました。したがって既に申し込まれた方は全員正規の席でご参加いただけるようになります。新たに参加ご希望の方はいますぐ事務局にお電話下さい。

《主な探訪予定地》

①西大寺観音院(真言宗)

宝木を奪い合う会陽で超有名。

②乙子城

宇喜多直家が初陣の勝利によって浦上宗景から与えられ、直家、飛躍の足がかりになった初めての城。比高約四八m、登山時間は約七分。

③砥石城

宇喜多直家の祖父能家が築いた城。千町平野を見下ろす絶好の場所。比高九五m、登山時間は二〇分弱。

④余慶寺(天台宗)

国重文の仏像や甲冑を所蔵。本堂・三重塔の姿がよく、児島高德の供養塔もあります。桜が実に見事なのですが、今年はどう……。

⑤竹久夢二生家・少年山荘

夢路ファンにはたまりません。大

正ロマンを存分に味わって下さい。

⑥静円寺(真言宗)

本堂・多宝塔が県重文。光明院玄関・医薬門も見事。

⑦朝鮮通信使資料館

通信使資料のほか、見事な「舟型だんじり」を展示。

⑧本蓮寺(日蓮宗)

牛窓の象徴。本堂等は重文。境内から見える海が実に美しい。

⑨安仁神社

式内社。備前国唯一の名神大社。※以上はあくまでも予定です。時間・天候などの都合により省略・変更する場合がありますのでご了承下さい。

《実施要項》

〔日程〕四月一九日(日・雨天決行)

〔集合時間〕午前七時二〇分厳守。

午前七時三〇分出発。

〔集合場所〕福山駅北口

(福山キャッスルホテル前)

〔帰着予定時間〕午後六時。

〔参加費〕 会員 四三〇〇円

一般 四六〇〇円

入館料・資料代・傷害保険料込み。

〔参加申し込み〕

現在受付中。至急、事務局に電話で申し込んで下さい。

〔その他〕

弁当・飲料持参。歩きやすい服装・靴で参加して下さい。

乙子城と宇喜多直家

四月バス例会に寄せて

平田恵彦

宇喜多直家は備前の戦国大名だが、烏雄として知れ渡っており（妻のおふくも秀吉の愛人として有名）、正直、私は好感をもっていなかった。

それが今回、バス例会で西大寺・牛窓・邑久を探訪することになり、城郭の好きな人にも興味をもてる史跡を探したところ、直家が初めて城主となった乙子城がこの周辺（岡山市乙子）にあることを知った。『日本城郭大系』によれば、遺構が比較的良好に残っている、とのことなので他の候補地とともに訪ねてみることにした。

最初の下見は暴風の日で、吉井川にせり出した丘陵の先端に築かれたこの城に登ると、巨体の私でさえ吹き飛ばされそうになった。城ははつきりいつて小さい。その辺の土豪でさえもつと大きな城を築いたのではないかと思えるほどである。しかし直家は、この小城から出発して最終的には備前一国の太守にまで上り詰めるのである。

宇喜多氏はもともと千町平野の南西部を支配していた有力な国人であった。ところが、直家の祖父能家

の時、島村豊後守に夜襲をかけられて能家は自害。居城であった砥石城とその所領すべてを失ってしまう。

直家は父とともになんとか落ち延び、尼寺に匿われていたという。

『備前軍記』によれば、その後天文一二年（一五四三）に浦上宗景に仕え、翌年元服後、初陣の功あつてこの乙子城を預けられるが、所領三〇〇貫、足軽三〇人だったという。ほとんどゼロから出発した一六歳の若造が城主となったわけだが、戦国大名への出発点としては元就よりもさらに不利だったといえる。

こうした男（現在の感覚だと少年）が這い上がっていくには確かに謀略・計略しかなかったのだろう。秀吉のような明るさがないのは、祖父を奇襲によって失い、自らも生地を追われたという幼い頃の原体験が大きいに思う。直家は烏雄にならざるを得ない宿命を背負っていたのである。そう考えれば、世評はあまりにひど過ぎるという気もする。

昨年、岡山では岡山城築城四百年記念の諸行事が実施され、その際、宇喜多氏関係の城が整備された。乙子城もその一環だったようで、遊歩道が整えられ、郭の雑草も刈られていて見学しやすくなっている。この城の歴史的意義はかなり大きいし、

登るのも一〇分足らずなのでバス例会には手頃だと判断した。みなさんにもぜひ見学してもらいたい。

乙子城の歴史については『日本城郭体系』『岡山県大百科事典』『岡山県の地名』等に記載があるが、図面がない。岡山の図書館に問い合わせた。しかし、それでもあきらめないのが平田流、なんとかちゃんとした図面を用意することができた。これは当日の例会資料に掲載するので、城郭ファンの方はお楽しみに。

一つ（実は最大の）心配がある。乙子城へ向かう道が狭いのである。バスが入らないとしたら、残念ながら見学はできない。今度の下見で佐藤達夫さんに見てもらって最終的にどうするか決めようと思っている。

『古事記』を読む

【実施要項】

日程 五月九日（土）

時間 午後二時から

場所 中央公民館会議室

講師 神谷和孝さん（名誉会長）

平田恵彦さん（副部会長）

テキスト代 一〇〇〇円（岩波文庫ワイド版『古事記』を使用）。

資料代 そのつど一〇〇円程度。

第五回郷土史講座

戦国大名としての毛利氏

―毛利元就は戦国大名か？―

だれもが、毛利元就は戦国大名だと考えていらっしやと思います。しかし元就は、北条早雲・斎藤道三・織田信長・武田信玄・上杉憲信などといった、いわゆる「典型的な」戦国大名とはやや異質な面を持っています。

それが、井上一族誅殺以前の領国内の統治方式であつたり、土地・検地制度であつたり、分国法（毛利家掟書）であつたりします。

また一方、毛利氏は輝元の代になると、戦国大名としての側面と織豊政権内の近世大名としての性格を併せ持つ複雑さがあります。こうした毛利氏は、とくに元就は果たして戦国大名といえるのでしょうか？ 今回の講座で、出内さんにそのあたりをしっかりと検証していただきます。

『実施要項』

日時 五月三〇日（土）午後二時

場所 福山市民図書館会議室

★注意してください。中央公民館や市民会館ではありません。

講師 出内博都さん

費用 一〇〇円程度（資料印刷代）

山城現地踏査報告

城郭研究部会

はじめに

城郭研究部会では、昨年から「備後古城記」の学習会の一環として、山城の現地踏査および測量調査を有志の手で実施している。以下は最近実施した調査の大略である。

なお、参考のために下に「広島県中世城館遺跡総合調査報告書」所載の図面を掲載するが、縮小コピーしてあるので縮尺は正しくないことをお断りしておく。

(1) 栗田城測量調査(二月二日)

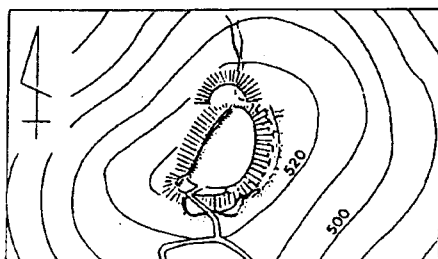
瀬戸町長和にある初期の山城で、長和清三郎宗正の名を伝え、永正年間三谷に敗れるという伝承がある。住宅地の中にあり、開発、耕作による破壊が大きい。二、三の郭、土塁に往時の面影をとどめているのみである。現在、測量図を作成中で、トレース終了後、発表したいと思っている。

(参加者) 出内博都、小林浩二、黒木日出人、高橋辰巳、坂本敏夫、木下和司、宮宗昭子

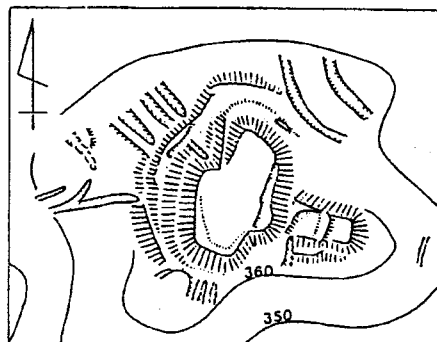
(2) 山城踏査(三月一日)

① 黒川明神山城(世羅西町黒川)

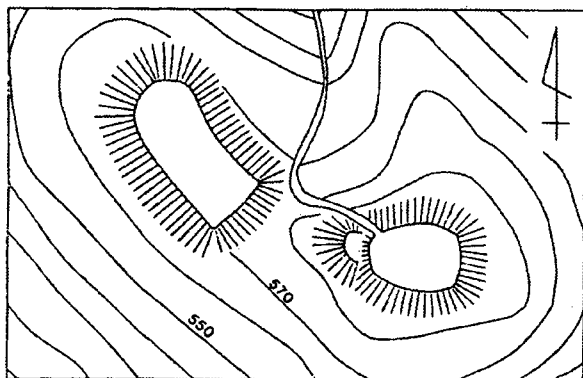
青少年休暇村の上にあり、円錐状



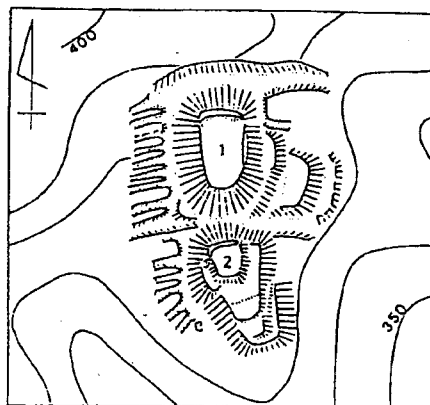
黒川明神山城跡略測図 (S=1:2,000)



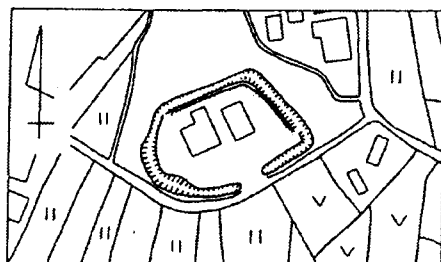
沼原城跡略測図 (S=1:2,000)



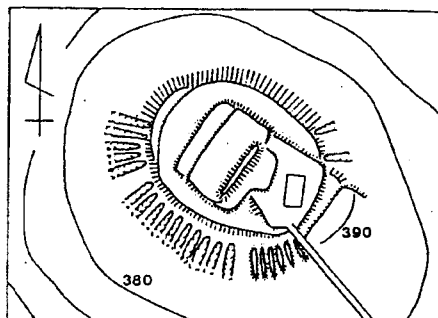
津田明神山城跡略測図 (S=1:2,000)



茶臼城跡略測図 (S=1:2,000)



松本土居屋敷跡略測図 (S=1:2,000)



茶臼城跡略測図 (S=1:2,000)

の玄武岩鐘の頂上にある。比高約一五〇mの小城。(注)掲載図に常郭道、虎口郭の一部を補充記入した。

②黒川(茶臼山)城(右に同じ)

地元民に尋ねても、地図で探しても不明。別に地元の婦人に「殿様屋敷」という遺跡の話聞き、案内されて

实地踏査した。なだらかな山路を数百m登ると、そこに二段郭の広い城郭式の館跡があった。自然石を組み合わせて部分的には石垣造りのすばらしい居館である。大内時代に砂鉄の管理人として来たという伝承のあるI家の山である。いわゆる長者屋敷であろう。

③沼原城(三和町敷名)

なだらかな丘陵先端を二条の堀切で切り、数条の畝状堅堀と二・三の連郭をもつ。それほど急峻でもなく、防備が厳重ともいえない。応仁の乱に毛利氏が東軍から西軍に寝返って手に入れた地だけに、城主として椋梨氏や敷名元綱(毛利元就の弟)の名を伝えている。

④茶臼城(天蔵寺山城、三和町敷名)

比高九〇m丘陵先端を急峻で、深い堀切で切断、主郭をさらに堀切で区切り、二つの郭群に分けている。1郭は東側に、2郭は南側に郭を連ねている。南側の郭は図面よりはまだ延びている。1郭の切岸は特に急峻である。

土居は山麓に天蔵寺(敗戦後に出家建立)跡の伝承や、現集落の中に「おきんでえ」の屋号をもつ家がある。山麓台地から平地へ移ったことがわかる。

この他、敷名には高井田城、平城、比丘尼城などがあるが、調査を省いた。

⑤津田明神山城(世羅西町下津田)

比高二二〇m、黒川明神山と同じ円錐形の玄武岩鐘で、山容はほとんど同じである。かなり急峻な山であるが、公園化しているので道は整備されている。在地の土豪金築勝七郎の名を伝えている。郭二段だけの簡単な構造である。

⑥茶臼城(同町下津田)

明神山の出城の伝承がある。お鏡餅のように二つの円形郭が重なった、文字通り茶臼の形である。麓からの観察のみで終わる。

⑦松本土居屋敷(右に同じ、町史跡)

館の周囲に四・五mの水堀をめぐらし、北と東側には土塁、空堀がある。現在も住居として使用されている。山城とは関係のない中世の名主(みょうしゅ)級土豪の屋敷と思われる。

(参加者) 出内博都、小林浩一、高瑞辰巳、坂本敏夫、佐藤錦士

事務局日誌

一月三日(火)

役員会開催。新年度役員で初めての会合を持つ。参加二一名。

二月七日(土)

古墳講座Ⅴ「大佐山白塚古墳見学会」参加二〇名。以前と比べ登山道が整備され、登りやすくなっていた。夜、事務局と講座参加者で会報発送作業を実施。高橋恭子さん、レギュラーコーヒの差し入れ。

二月十四日(土)

「古事記」を読む。講師佐藤壽夫さん。本文から少しはなれて「古事記」成立の謎について勉強。参加一二名。二月十五日(日)

芦田町郷土史研究会と共催で「芦田町の史跡巡り」を実施。殿奥城は現地の方々が下草刈りをして下さりとても登りやすくなっている。大感謝。当日は絶好の天気で開催約一三〇名。二月二一日(土)

「備後古城記」を読む。参加一四名。講師坂本敏夫さん。二月二八日(土)

第二回郷土史講座「邪馬台国時代の吉備と出雲」講師網本善光さん。青銅器の分布を手がかりに特に出雲の古代史に焦点をあてた講演。参加五三名。於福山市民図書館会議室。

三月七日(土)

古墳講座Ⅴ「加茂造山古墳見学会」参加二一名。参加者多数でクルマが足りなくなり、あわてる一幕も。夜、事務局と講座参加者で行事案内発送作業を実施。高橋恭子さん、またまたレギュラーコーヒの差し入れ。謝辞!

三月二二日(木)

役員会開催。今後の行事や会則改正などについて協議。参加一七名。

三月二四日(土)

「古事記」を読む。参加一九名。講師柿本光明さん、門田幸男さん。三月二八日(土)

第四回郷土史講座「備後の式内社について」講師平田恵彦さん。国史現在社と式内社の関係から当時の備後の政治情勢を推理。参加四二名。三月二九日(日)

「雲井城登山会」昨年の仇を見事に討ち果たし、絶好の日和。ただ二時間の登山はきつかった。参加四八名。四月五日(日)

加茂町石造物調査参加四名。加茂町中野・上加茂片側周辺の石造物の調査を実施。

★講座などの会場は、とくに断わりがない場合、すべて中央公民館です。また、山城調査については城郭部会の報告を参照してください。

第一六回親と子の古墳めぐり

主催 備陽史探訪の会
共催 福山市教育委員会

一六回目を迎える「親と古墳めぐり」ですが、今年も会全体の行事として大成功させたいと思っています。近年、小中学生の参加が減ってきています。お子さん、お孫さん、ご近所の子供たちにぜひご案内下さい。

《実施要項》

【実施目的】

親と子で古墳を見学することや遺跡に触れあうことにより、歴史を学ぶことの楽しさや面白さを体験していただき、改めて歴史学習とこれらの文化財の大切さを意識していただきます。

【参加資格】

とくにありません。ただ、原則として、小学生・幼稚園児は保護者の付き添いが必要です。大人だけの参加もできます。また、約五キロメートルを歩行します。

【見学場所】

福山市金江町金江江周辺で、古墳時代後期の古墳(葉江古墳群)、祭祀遺跡および貝塚等をめぐります。
岩田古墳群(元祿塚古墳中心で五基)―六ツ塚古墳群(六基)―四ツ塚古墳(四基)―西の塚古墳―天津磐境

―馬取貝塚

【日程】 五月五日(祝・小雨決行)

【集合時間】 午前八時一〇分(厳守)

【交通機関】

トモテツバス一五番乗場「金江」行、午前八時四〇分発に乗車。下車するバス停は「園芸センター」。

所要時間は約二〇分。バス料金は大人三七〇円/子供一九〇円。

【集合・受付場所】

福山駅南口(釣人の像前)

現地に近い方は、午前九時「福山市園芸センター」駐車場に集合。

【解散時間・場所】

午後三時三〇分に現地(馬取貝塚)で解散し、福山方面に帰る人はその後、JR松永駅まで歩きます。

【参加費】

大人 五〇〇円/子供 三〇〇円

資料代・傷害保険料込み。ただし、交通費は各自の負担です。

【会員とその関係者の参加申し込み】

往復はがきに参加希望者と各自の年齢、住所、電話番号、参加者同士の関係(小中学生は学年も)を明記の上、四月二五日(土・必着)までに事務局へ申し込んでください(一般募集は締め切り日が違います)。

【その他】

弁当・飲料持参のこと。歩きやすい服装・靴で参加して下さい。

第四回郷土史講座

太田庄地頭三善氏について

四月の郷土史講座は、鎌倉時代の太田庄の在地構造と、そこを支配した地頭三善氏の興亡について、木下和司さんにお話いただきます。

太田庄と三善氏の関わりは、京下り官人として頼朝に仕えた門注所執事三善康信が、太田庄の地頭職を得たことに始まります。その後、康信の子康連の代に、太田庄は太田方と桑原方に分かれ、康連は桑原方の地頭職を相伝します。この桑原方については記録がよく残っており(『高野山文書』)、備後の中世史の中でも個性豊かな人物が数多く登場します。

その代表が桑原方の領家(高野山)の預所となった、ひととき異色な光芒を放つあの淵信です。この淵信と三善氏との権力闘争の過程でさまざまなドラマが生まれるのですが、最終的には三善氏は敗れ、在地での勢力を失っていくのです。

六月のバス例会の予習にもなりますのでぜひご参加下さい。

《実施要項》

日時 四月二五日(土)午後二時

場所 中央公民館会議室

講師 木下和司さん

費用 一〇〇円程度(資料印刷代)

加茂町石造物分布調査

現在、上加茂地区の調査はほぼ終了し、今後は八軒屋・下加茂地区を中心に調査します。日程等は以下のとおりですので、奮ってご参加ください。

《実施要項》

日程 四月二六日(日)

五月二四日(日)

六月七日(日)

集合時間 午前一〇時

(終了予定は午後三時半頃です)

集合場所 賀茂神社(加茂町菅原)

その他 弁当・飲料持参。山歩きのできる服装・靴で参加のこと。

編集後記

先日、五年ぶりに生まれ故郷に帰り募参りをしました。ふるさとのシンボル式内名神大社「丹生川上神社上社」は、ダム建設で湖底に沈むため山の中腹に移転していました。新しく完成した社殿は立派すぎてなんだか違和感がありました。この谷間の集落は二年後には景観が一変します。

(磐座亭主人)

備陽史探訪の会事務局 ☎ 〇五五

福山市多治米町五一九・八

八〇八四九(五三)六一五七